江口草玄の書の雑誌『ひびき』について

松矢　国憲

江口草玄が主幹として編集・発行した、主に児童・生徒向けの書の学習のための雑誌『ひびき』[図1]があった。今日も書道の競書雑誌は市中に数多あるが、書道塾で一般的に続けられている先生、師匠の書いたお手本のとおりに書かせる、その上、古典の臨書でさえも同様にして、師法と同じその用筆法をなぞり、その出来を評価するような競書雑誌とは異なり、『ひびき』は、子供達一人一人の人間としての創意を刺激し、「文字を書く」ことによって心の生長を培い、育てるため、多様な表現を児童・生徒に体験させるものだった。筆法取得、段級位至上の競書誌というより、表現の幅広さを経験し、書の広さ、奥深さを通して、個人の様々な表現を育む雑誌であった。この雑誌を通して草玄が子供達において実践した書教育を探り、その特異性を詳らかとすることは、草玄の書観の一側面が明らかとなるにとどまらず、自身の作品制作にも繋がっていったものと考えられることから、草玄の『ひびき』での活動を通覧し、考察を加える。

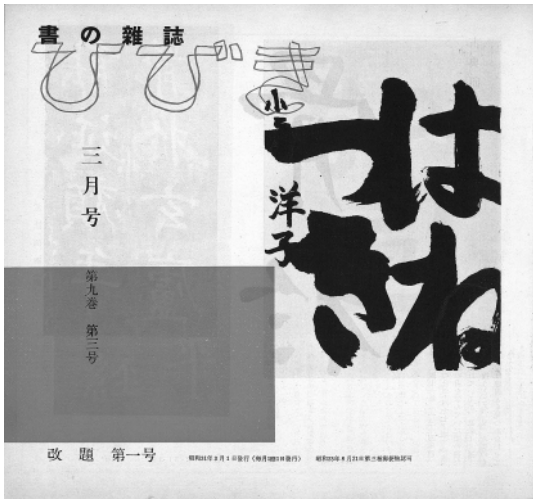


図1　『ひびき』創刊号　昭和三十一年（一九五六）三月一日発行

一、『ひびき』誌について

a.『ひびき』前史、『墨友』と『書教育』

『ひびき』誌に触れる前に前身の『墨友』について概略しておく。

『墨友』は、墨人会の「小・中・高校生のためのテキスト」(註1)として機関誌『墨人』の発行と同じ昭和二十七年（一九五二）四月に創刊され(註2)、「墨人会編集、編輯人関谷大年、発行人森田子龍、発行所書道出版社(註3)」で刊行している。その後、同二十八年十月号（第六巻第一〇号）から「書教育学会編集(註4)」に改組され、同時に判型が長型（25.8×12.0cm）から正方形型（17.7×19.0cm）に変わっている。提出作品の評価は、「内容」「表現（態度）」「（表現）技術」の三点から、「大変よい」「ややよい」「よくない」の三段階を3、2、1の数値化して評点を付けるものであった。草玄も墨人会編集ということから参加しており、提出課題の参考作品掲載と子供達の提出作品への評の掲載が発行当初の判型が長型期には確認できるが、判型が正方形型に変更された後は、参考作品の掲載はなく、子供達の提出作品の評のみである(註5)。

一方、『書教育』は、「書教育学会編集、発行人森田子龍、発行所書道出版社(註6)」で昭和二十八年（一九五三）四月一日に創刊されている。こちらは『墨友』創刊の一年後の創刊で、書教育の確立推進のため「書教育学会」を結成し、研究誌『書教育』を中心に研究を進める指導者用の書の冊子である。B5判で創刊、第七号（同二十八年十月号）から『墨友』と同型の正方形型となっている。小学校の習字から高等学校の芸術科書道まで、教科書や手本問題、カリキュラム、指導要領の改訂、実践記録、現場の問題等を扱っていた。

（註1）
『書の美』終刊号（昭和二十七年三月号）では、『墨人』の案内と共に『墨友』の案内が掲載され、「・高校、中学、小学校に於ける書教育雑誌／・すべての点に於て従来の在り方に大反省を加えた／・見て美しく習えば幅と深さを持って楽しい」とある。また、『墨人』創刊号（同年四月）には、「○人間性の開発を目的とする書芸術教育／○日常書写技能の習得をはかる習字教育／の両面に亘る文字を書く生活を広く学習出来る／理想的な小・中・高校生のためのテキスト」とある。なお、以降、引用文中、改行は「／」で示す。また、旧字体は新字体に改めた。

（註2）
『墨友』創刊号も「改題第一号」とされ、第三種郵便認可が「昭和二十三年八月二十一日」となっていて、『書の美 学生版』（昭和二十三年八月創刊）の認可日と同じである。『墨友』第二号に第五巻第四号と記載され（創刊号に「第五巻第三号」の巻号記載はなし）、巻号の連続も一致することから、『墨友』が『書の美 学生版』の改題と判る。

（註3）
昭和三十年二月号（第八巻第二号）から墨美出版社発行。

（註4）
昭和二十八年十月号までは書教育学会の代表者は関谷義道と記されていたが（十一月号欠本で未確認、不明）、十二月号からは代表者名掲載が無くなっている。発行人は森田子龍のまま。

（註5）
草玄の『墨友』掲載記事目録は、『白寿　江口草玄のすべて』図

b.『ひびき』

書の雑誌『ひびき』は、江口草玄主幹により、昭和三十一年（一九五六）三月一日発行号を創刊号の改題第一号とし、草玄が墨人会を脱退した年末の同五十一年（一九七六）十二月一日発行号までの二十一年に亘り、毎月欠くことなく、全二百五十冊からなる（註7、資料1、2参照）。判型は『墨友』の正方形型と一緒である（註8）。その発行等の変遷について表1に示す。

表1　『ひびき』発行等の変遷

巻号	発行年月日	特記事項
三月号（第九巻第三号・改題第一号）	昭和三十一年（一九五六）三月一日	創刊。編集人江口草玄／発行人森田子龍／発行所墨美出版社／事務取扱い京都市北区紫竹下緑町五四 ひびきの会／二十五円
四月号（第九巻第四号・改題第二号）	昭和三十一年（一九五六）四月一日	「発行所墨美社」に変更。
五月号（第九巻第五号・改題第三号）	昭和三十一年（一九五六）五月一日	「編集兼発行人江口草玄／発行所・京都市北区紫竹下緑町五四 ひびきの会」に変更。／事務取扱い表記なくなる。
三月号（第十一巻第三号・改題第二十四（二十五）号）	昭和三十三年（一九五八）三月一日	巻号を「改題第二十四号」と誤記。
四月号（第十一巻第四号・改題第二十五（二十六）号）	昭和三十三年（一九五八）四月一日	巻号を「改題第二十五号」と誤記。
五月号（第十一巻第五号・改題第二十七号）	昭和三十三年（一九五八）五月一日	巻号が正しく「改題第二十七号」と記載される。
六月号（第十一巻第六号・改題第二十七（二十八）号）	昭和三十三年（一九五八）六月一日	巻号を「改題第二十七号」と誤記。以降、終刊まで一号少ない表記のまま続く（以下省略）。
一月号（第十四巻第一号・改題第五十八（五十九）号）	昭和三十六年（一九六一）一月一日	価格改定三十円
二月号（第十七巻第二号・改題第九十五（九十六）号）	昭和三十九年（一九六四）二月一日	「発行所・京都市北区紫竹下緑町五四 日本書道学舎」に変更。
四月号（第十九巻第四号・改題第百二十一（百二十二）号）	昭和四十一年（一九六六）四月一日	価格改定四十円
四月号（第二十二巻第四号・改題第百五十七（百五十八）号）	昭和四十四年（一九六九）四月一日	価格改定五十円
一月号（第二十五巻第一号・改題第百九十（百九十一）号）	昭和四十七年（一九七二）一月一日	価格改定七十円
二月号（第二十六巻第三（二）号・改題第二百三（二百四）号）	昭和四十八年（一九七三）二月一日	巻号を「第二十六巻第三号・改題第二百三号」と誤記。
八月号（第二十六巻第八号・改題第二百九（二百十）号）	昭和四十八年（一九七三）八月一日	発行所住所変更、「京都市東山区山科音羽野田町一ノ四・B棟六二」
一月号（第二十七巻第一号・改題第二百十四（二百十五）号）	昭和四十九年（一九七四）一月一日	価格改定百円
十一月号（第二十九巻第十一号・改題第二百四十八（二百四十九）号）	昭和五十一年（一九七六）十一月一日	十月、山科区が東山区から分区し、住所表示変更、「京都市山科区音羽野田町一ノ四・B六二」
十二月号（第二十九巻第十二号・改題第二百四十九（二百五十）号）	昭和五十一年（一九七六）十二月一日	巻号を「改題第二百四十九号」と誤記。／表紙に堀尾勝彦が継続する『響』を表記。／巻末の「編集室」には草玄が「今月号までは私の編集です」とあるが、編集兼発行人には堀尾名が記されている。／発行所、住所、共に山科のまま。

録（二〇一八　新潟県立近代美術館）「江口草玄　文献一覧」二百八十五頁参照。

（註6）
№21（昭和三十年二月）から発行所が墨美出版社に変更。

（註7）
全二百五十冊だが、途中、巻号の誤記がある。ただし、終刊号の第二百四十九（二百五十）号は、誌名が漢字で『響』となり、堀尾勝彦編集とした表記となる。表1および、資料1「書の雑誌『ひびき』全二百五十冊表紙図版」、資料2、書の雑誌『ひびき』全二百五十冊内容目録」、参照。以降、巻号表記の（　）内は正しい巻号数。

（註8）
ただし、巻号によって若干の大きさに差異がある。

『ひびき』誌は巻号について『墨友』の改題として引き継いでいるものの(註9)、内容については、連続性はないものとしている。草玄は、「書の雑誌「ひびき」創刊の御挨拶」[図2](註10)の中で、「「ひびき」は「墨友」の延長ではなく、日本書教育学会とも全く無関係で、私個人の責任に於て新しく出発したいと思っています。」と、出版物としては『墨友』の改題号として巻号は記載され続けられるが、別物として始めた。「いろ〳〵な傾向のものを掲載して一方に偏しないで、然もその中に書表現の意義を見出していきたいと思っています。」と、「広い一般社会の人々と共に進」みながら、「かくあらねばならないというものを盛り」、「いらざる抵抗をさけながら前進していきたい」と、創刊に際し草玄は考えていた。「一方に偏しないで」とあるように、草玄は昭和二十七年(一九五二)に墨人会を立ち上げ、墨人会に帰属しているのだが、『ひびき』の指導者には、墨人会以外の書家たちにも創刊以来、終刊まで依頼しており、「書表現の意義を見出」すことを客観的に研究、指導していこうとしていたと思われる。これについては、「二、『ひびき』の内容」に後述する。

この『ひびき』に参加している指導者および児童、生徒の地域を確認すると、北海道から九州鹿児島まで全国的に広がりを持っていたが、およそ三分の二の都道府県に支部があり、参加していることが掲載記事や子供等の競書成績表などから窺われる。

二、『ひびき』の内容

a.『ひびき』の指導者

『ひびき』の掲載、執筆者の一覧は別表のとおりである。なお、この別表の人々のみが全ての『ひびき』に関わっていた指導者ではなく、参考作品の掲載や記事執筆のなかった支部指導者達もいた。

参考作品として子供達の作品も取り上げているが、指導者として当然墨人会会員が多いが、前掲の「創刊の御挨拶」のとおり、他団体の者も「いろ〳〵な傾向のものを掲載して一方に偏しないで」とするために多く執筆依頼している。

毛筆では、創刊号である昭和三十一年(一九五六)三月号に草人社の小林龍峰(註11)が中学一・二・三年の規定の参考作品を掲載していたり、子供の作品の評も掲載している。龍峰は、草玄が師事した上田桑鳩と戦前期に同門だった書道藝術社にいた大澤雅休に師事している。雅休の平原社は草玄が昭和二十四年(一九四九)年三月初めに桑鳩に師事する以前の独学期、桑鳩を中心とした森田子龍編集の『書の美』の購読の他、平原社の機関誌『書原』も購読し、雅休の下で学ぼうかとも一方で考えていたことがある人物であり、草玄自身に近いものであったと思わ

図2　江口草玄「書の雑誌「ひびき」創刊の御挨拶」

書の雑誌「ひびき」創刊の御挨拶

書教育学会の実践誌として「墨友」のはたして来た役割の重さ、功績の大、それは、森田子龍氏がそのことに注ぎこんで来た熱情といいますか、一個人としての事業を全く無視した仕事として今まで推し進めて来たそのことと共に、書教育界に蘇生不滅の火を点じたものと言わねばならないと思います。

この度の「墨友」の廃刊は、もっと広い立場で森田子龍氏が奉仕的な仕事をするという当然な理由を持つとしましても、非常な残念さをも又思うのです。

その意味で今回、森田子龍氏をはじめ多数諸氏の御協力と親身な御助言とを頂きましたので、「ひびき」として、新しい姿の書の雑誌を三月号から創刊する決意を持ったのであります。

けれども「ひびき」は「墨友」の延長ではなく、日本書教育学会とも全く無関係で、私個人の責任に於て新しく出発したいと思っています。

現在の広い一般社会の人々と共に進むという形の中に、しかもかくあらねばならないというものを盛りながら、いらざる抵抗をさけながら前進していきたいと思っているのです。

参考作品も、広い部面、いろ〳〵な傾向のものを掲載して一方に偏しないで、然もその中に書表現の意義を見出していきたいと思っています。

大体の内容として、古典研究、かな、硬筆、小学から高校一般までの各学年別の半紙規定、作品研究、等々を、それ〴〵二人以上の諸先生、並びに児童作品によってやっていきたいと思っています。

何卒引き続いて御支援頂きますよう切にお願い申上げる次第です。

尚若し三月号以降御不要ならば、大変お手数でも私宛にお葉書を至急頂きたく存じます。頂かなければ継続御承諾として三月号から引き続いてお届け申し上げます。

新しい「ひびき」の実際の姿を三月号でぜひご覧下さいますよう懇願申し上げます。

江口草玄

(註9)
第三種郵便の手続きを省くため、巻号を引き継ぐこととなった。

(註10)
『墨友』第二百号附録「森田子龍『墨友』の廃刊について」・江口草玄「書の雑誌「ひびき」創刊の御挨拶」。以下、草玄の御挨拶全文・書教育学会の実践誌として「墨友」のはたして来た役割の重さ、功績の大、それは、森田子龍氏がそのことに注ぎこんで来た熱情と言いますか、一個人としての事業を全く無視した仕事として今まで推し進めて来たそのことと共に、書教育界に蘇生不滅の火を点じたものと言わねばならないと思います。／　この度の「墨友」の廃刊は、もっと広い立場で森田子龍氏が奉仕的な仕事をするという当然な理由を持つとしましても、非常な残念さを又思うのです。／その意味で今回、森田子龍氏をはじめ多数諸氏の御協力と親身な御助言とを頂きましたので、「ひびき」として、新しい姿の書の雑誌を三月号から創刊する決意を持ったのであります。／　けれども「ひびき」は「墨友」の延長ではなく、日本書教育学会とも全く無関係で、私個人の責任に於て新しく出発したいと思っています。／現在の広い一般社会の人々と共に進むという形の中に、しかもかくあらねばならないというものを盛りながら、いらざる抵抗をさけながら前進していきたいと思っているのです。参考作品も、広い部面、いろ〳〵な傾向のものを掲載して一方に偏しないで、然もその中に書表現の意義を見出していきたいと思っています。大体の内容として、古典研究、かな、硬筆、小学から高校一般までの各学年別の半紙規定、作品研究、等々を、それ〴〵二人以上の諸先生、並びに児童作品によってやっていきたいと思っています。／何卒引き続いて御支援頂きますよう切にお願い申上げる次第です。／尚若し三月号以降御不要ならば、大変お手数でも私宛にお葉書を至急頂きたく存じます。頂かなければ継続御承諾として三月号から引き続いてお届け申し上げます。／新しい「ひびき」の実際の姿を三月号でぜひご覧下さいますよう懇願申し上げます。／　江口草玄

(註11)
大澤雅休の平原社に属し、その後、岡部蒼風、池田水城らと草人社を結成する。『書教育』第二号(昭和二十八年(一九五三)五月一日発行)では、「書教育展開の一試案」が東京都立戸山高等学校教諭名で掲載されている。

れる(註12)。また同じく書道藝術社の桑原翠邦や手島右卿の作品や記事掲載も『ひびき』誌上に確認できる。

日展系では、松井如流の参考作品が昭和三十七年(一九六二)三月号に《心事数茎白髪生涯一片青山》の作品[図3]と記事を、そして同四十四年(一九六九)三月号にも「石門碩」の参考作品を書いている[図4]。また、参考例として同三十七年(一九六二)十二月号には拓本だが豊道春海の《日光山輪王寺》も取り上げている[図5]。翌年七月号には、書海社の松本芳翠《天地一沙鷗》[図6]、十月号には日本書芸院の谷辺橘南の自詠の歌を散らし書きした小色紙[図7]、同じく日本書芸院の村上翔雲への神戸新聞社記者によるインタビュー記事「純粋に表現の場を与えよう」を同四十六年(一九七一)六月号、同五十年(一九七五)十一月号では高校・専門部で「孝女曹娥碑」[図8]を取り上げるなどしている。

墨人会を結成して、袂を別った上田桑鳩には、当初、誌面に桑鳩色を無くしたかったのか、それともやはり臆したのであろうか、依頼はしなかったようだが、しかし、昭和三十九年(一九六四)十一月頃、腹を決め、参考作品を依頼する手紙を送ったようだ。同年十二月二日付(三日消印)で桑鳩は草玄に四点、『木簡集英』からの臨書を送った返信があり、そこに八年近く経った草玄ら墨人メンバーへの桑鳩の思いが綴られている(註13)。その返信を受け、草玄の思いも、同年同月十四日付で桑鳩に送った手紙の下書きが残る(註14)。この手紙を受けて桑鳩は「書翰拝見全部了解十二月十八日」と、師として草玄の思いを広い心で汲んでいる。そして翌四十年(一九六五)一月号に中学一・二年の見本として桑鳩臨書[図9]が急遽掲載されている。

また、硬筆でも、始め墨人会会員で岐阜大学の教授でもあった関谷義道が担当していたものが、昭和三十三年(一九五八)七月から奎星会の伊勢屋光華が担当し、同三十五年(一九六〇)三月からは、小林龍峰が加わっている(註15)。途中、井関聴松、政本遂之、飯原弘喜が加わったりするも、硬筆部は、この二人が専らである。なお、草玄の硬筆の言説や提出物への評はあるものの、参考作品掲載はない。

図3　松井如流

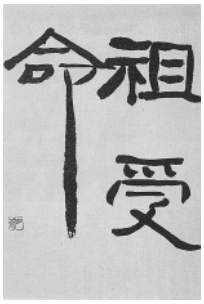


図4　松井如流

図7　谷辺橘南

図5　豊道春海

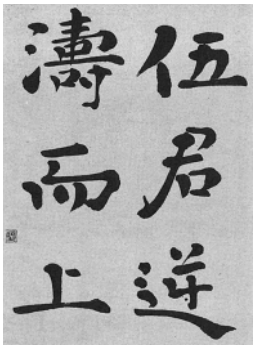


図8　村上翔雲

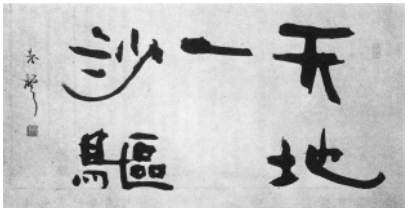


図6　松本芳翠

図9　上田桑鳩

※図3―9、いずれも『ひびき』掲載号より転載。

(註12)
雅休から草玄宛の手紙が残る。昭和二十三年(一九四八)五月十三日消印手紙:誌代拝着しばらく御待ち下さい。それまで、臨書をして送つて下さい。御地にもお仲間がをりましたらば共同して研究会でもいたして向上せられるとよいと思ひます。四五人熱のある方が居てしつかりおやりになれば向上顕著だと思ひます。良寛の本場、御地の書人の出現を期待いたす次第であります。/先は右まで、御同好がありましたらば書原に結びつけて下さい。先は匆々。/同年同月二十七日消印手紙:江口様/大沢生/拝啓御たづねの件、一般的にはすぐれた古典ならば何でもよいといふことになります。その鑑賞に徹してその技法に理解がつけば正しい学書となると思ふのであります。但し、何を次に習ふべきかといふことはその人々によつて一定せずともよろしいわけです。/　誰にでも師事して添削を数回受ければその特長と欠陥とがはつきりとわかると思います。私は指導を惜むわけではありませんが、他の指導者とは異つたシステムを持ち又方法をもつが為に、それは多少特別なので、よくよく縁あつて私について本格的に習ふ人にのみ強いて、他の方には、その人の作品について私の考へをのべるだけにしてゐます。でないと、その人の師の方針と齟齬して迷はせることがありますのでわるいことと思ひますから、雑誌でもごらんになつてから私の方針がわかれば一層ふかいつながりをもつて共に研究することになるかと思てます。この点もお考へ下さい。雑誌購読ならどんな立場でもよいが、その人に師事となると、一生の運命に関することですからよくお考へになつてこの人ならと思はれる方を選んで驀進されるとよいと思ひます。/只君の書風からすれは弘法大師か顔真卿を深くせられたらもつと豊饒な書性となるのかと思ひますか如何。/雑誌は六月初めに出ます。

(註13)
乍遅延臨書四通届けました何れも木簡集英より臨書しました。「衆」は上巻三頁、「四百五十」は上巻八頁、「建国」は同二五頁、「長」は下巻八頁より臨書してあります。原字を併載されるだろうから報告しておきました。/次に一言述べなければならぬ思いました、添え書き的に書きます。御判読下さい。/というのは、僕は墨人の人達も、皆僕の子供だと思っているので、どのようなことを申越されても、大方のことは承諾して引受けています。例えば、墨美における蒼海の書論の如きです。曾ての事情を知っている人たちからは、さまざまな批判も受けますが、僕はそれらを問題とせず、子供等が成長し発展することの為なら何でも引受けてやるのが、親だと思って敢えて馬耳東風にしているのです。ところで、墨人の人たちは、無沙汰過ぎます。それはそれでよいとして、僕が必要な時には、用事を申付けてこられるのです。僕は親として、総てを許容して申込みを受容れていますが、それは僕だけに通じることであって、このような態度や心構えでは、他人に通じないことであることはいうまでもありますまい。僕はそれでよいとして、他人様には、どうかこのような態度や仕儀はしないようにして下さい。社会に通じないことをしては、君等が折角よいことをしながら、社会から批判されるようなことでもあると、それは前衛運動が十分に効果をあげえないことになるのです。僕はどのように立場を異にするとも、前衛運動が発展することを念願して止まないものなので、前衛陣営の者全部が、誠心誠意をもって、世に処してくれることを、祈ってやまないのです。前衛運動を推進するためには、先ず自分の行動から正していかなければならぬの鉄則の実行からしなくてはならぬことを今一度改めて考えてほしいのです。言論や作品だけでなく……そのことがいいたくて、少々ながら苦言を呈

仮名では日展系の池田烏川(註16)が担当し、時折、森田竹華(註17)が加わっている。

このように墨人会以外で書道藝術社の流れの書家連に依頼し、応諾され、『ひびき』誌上にその書や原稿を掲載する場合が多く確認できるが、全てが書道藝術社系ばかりではなかったことが判る。

しかし、それでも実現できなかった人もいた。桑鳩に遡ること三年前、草玄は、西川寧に依頼している(註18)。昭和三十六年(一九六一)十二月十四日付で西川寧から断りの手紙(註19)を受け取っている。西川の手紙の文言通り多忙であったのかもしれないが、他方、この通り一遍の手紙は、かつて草玄が同三十年(一九五五)九月五日付『書芸新聞』に「西川氏に問う―対談『これからの書』を見て」(註20)で、西川の意見が旧態の固定観念から全く逸脱しておらず、また、恣意的悪意を感じると、「前近代的な構え及び排他的独断的謬論に対して大きな憤りを覚える」と断じたこと等が根にあったのではないかと思われる。この断りで改めて、年月は前後するが、前掲の桑鳩への草玄の手紙から言葉を借りるならば「鉄のカーテン式の大きな自縛の壁の中に身を沈めてしまう人々」という、変わらない書家の意識を再認識したと思われる。草玄らが批判していた旧態の筆頭であった西川寧に対し、しかし、『ひびき』では「参考作品も、広い部面、いろ〳〵な傾向のものを掲載して一方に偏しないで、然もその中に書表現の意義を見出していきたいと思っています」として、子供達の書教育では純粋に多様な傾向の表現を示し、幅広く感じ取ってもらおうと間口を広げ依頼したことに対して、西川、謙慎会側から断ってきたのであるから、既に日展に異を唱えて墨人会を結成した時から十年近く経ているのに、未だ変わらない守旧の姿勢を確認したところであろう(註21)。こうしたこともあり、『ひびき』には、終刊まで謙慎会系の掲載はなかった。

なお、戦前、書道藝術社にいた金子鷗亭も昭和三十八年(一九六三)一月号に「わが作品 鼠の造形」として作品と記事を掲載しているが、同五十年(一九七五)には、依頼が断られている(註22)。既に『ひびき』での掲載もあることからも、これは文面通り、忙しかった為と思われる。

b.『ひびき』の指導内容

『ひびき』での学習の課題計画を草玄は別図1のように作成し、課題の語句や子供達が何を学び、この学習で何を生長のため求めるかを明らかにして、そして、月次の指導者の一覧も別図2のように計画表を作りつつ、『ひびき』の編集、そして指導を進めた(註23)。別図1を『ひびき』の発刊された各号と比較すると、別図1中の昭和三十三年(一九五八)十月号、中二・三年の項では「×」印が付き、空白から矢印を引いて差し替えているように、後でまとめたものではなく、当初計画とは変更された目標、内容となったことが冊子でも確認できる。また途中、同三十七年(一九六二)頃から複数の学年に亘って目標設定が行われ始めていることも確認でき、それは別図3のように、終刊の同五十一年(一九七六)分に亘って確認できる。この課題計画は、こうした変更等も確認できることから、事前にある程度の期間分を計画して作られていたと推定できる(註24)。

そして、指導内容は大きく、毛筆を中心とした部門と硬筆の部門とで構成される。草玄は、毛筆と硬筆の両者を学ぶ違いについて次のように語っている。

(前略)私たちの日常生活の文字を書くいろいろな場合に不便を感じたり困ったりしないように、その目的の場合にふさわしい書き方ができて、ペンや鉛筆の用具になれることの勉強もとても大切なことなのです。「字を書く」勉強と言えした次第で、私的な感情等は一切ありません。その点純粋に受取って下さらば幸甚/桑鳩/草玄君/十二月二日

(註14)
39.12.14.上田先生宛/ 先日は御無理なお願いをしまして、その、お願いしておきました期日も過ぎましてもお返しも頂けぬものですから、実はあきらめかけておったところなのです。〝ひびき〟一月号を編集中でしたので、急遽レイアウトを変更して、先生の臨書を使わさせて頂きました。有りがとうございました。/ 然もお手紙も頂戴しておるのにもかかわらず、例えそれが〝ひびき〟の編集中の為とは申せ、今日まで御礼の御手紙も差し上げず、本当に申訳ありませんでした。/ ところで、御文面の如く、先生に対して全く無沙汰過ぎました。お詫びの心の中で、今そのことを心から認めます。申訳ないことでありました。/ 何時か、東京展の時だったと思いますが、有一との話の中で、先生へ御無沙汰にしているが一度行ってみようか、となった時もあるのですが、展覧会場の何かの都合でそれが実現出来なかったことがあったりしましたが、とに角、やっぱり具体的には無沙汰の失礼をして来ているわけです。/ 今後は御無沙汰にならないように注意していきたいと思っております故、どうかよろしくお願い致します。/ しかし、墨人のみんなは、決して何か他意があって御無沙汰をしているのではないと思われます。特に私に於ける〝ひびき〟の場合、いわゆる低俗的な意味でのただ我利々々的なだけでの先生の利用なんていう、ケチなコンタンではないことだけは確信をもって申し上げることが出来ます。/ 森田さんの墨美の場合は私の関知しないところですが、殊更な師弟関係のない〝ひびき〟ですので、時々はどうしても狭く低くなり勝なのを、いろ〳〵な人たちからのお力を貸して頂いて、それを高め、そして、ひびきを見ることの中で書というものに関心を持ち、そして、自分の中に書というものを育てつつある若い人々に、より広い、より高次な作品を見せることによって、書に対する視野を拡大させてやることは、今の私たちとして、一面為さねばならない当然の義務だと思うのです。/ その意味では、先生たちのお力を借り、そのお力を利用すると言えば言えるでしょう。しかし今のことは、書というものの真正運動をやらねばならない、今の私たちに果せられている一つの然し重要な任務だとも思われます。そういう場が全国で沢山あればある程いいわけで、書の雑誌というものをその姿勢の中で編集し、純粋さの中で考えた場合にのみそれ〳〵の雑誌の存在価値が認められて来る筈です。御理解下さって御協力下さる人々や、或は、鉄のカーテン式の大きな自縛の壁の中に身を沈めてしまう人々や、いろ〳〵ですが、少くとも私はひびきはそういう場所でありたいと思い、そのことを何時もひびきの為の考えの中心にしているわけです。どうも口はばったいことを書きつらねてしまいました。言葉足らずで十分にまだ言い切れませんが、おゆるし下さいますようお願いします。どうか、これからもひびきの為にもさらには、だから書それ自身の為にこそお力をお貸し下さいますようお願い申し上げます。

(註15)
龍峰は、その後、昭和三十八年(一九六三)『ひびき』六月号から翌年十一月号までで(途中掲載ない月あり)十四回に亘って「十四回でマスターできる…硬筆書写講座」を連載し、それを一冊にまとめて日本書道学舎発行で同四十年(一九六五)一月号の中で同著の出版が告知されている。龍峰は終刊まで硬筆を担当した。

(註16)
当時、京都在住。昭和二十七年(一九五三)第八回日展より

ます。ですからそれを「ペン習字の部」で手本をよく見て一生けんめいに習って、正しく勉強していきましょう。／　それから、もう一つ「書」の勉強があることも忘れてはいけません。毛筆で字を書くことです。昔、ペンや鉛筆がまだ私たちの日常の生活の中で重要な用具でなかった時には毛筆で「字を習う」勉強もしましたが、今は毛筆は即ち一般実用の用具ではなくなっているのですから、字を習ったり、書いたりする勉強はペンや鉛筆でするのが最も現在適切な方法なのですが、それではそのように現在実用の用具ではなくなっている「毛筆で書く」ということ即ち「書」の勉強とはどういうことなのでしょうか。昔の人が「心正しければ筆正し」と言っていますが、筆はそれほど私たちの心の中の微妙さをぴったりと伝えてくれるものなのです。毛筆でかくことによって、そのような微妙な毛筆の働き方を知り、自分自身を深く深く、ひろくひろく、掘りおこしていくことなのです。（中略）／　文字を書くということでは以上の二つの場合同じなのですが、目的といいますか、はっきりと違ったものであるということをしっかりと考えていきましょう。そして、その両方共がとてもとても大切なのですから、私たちはこの広い場をもった「ひびき」で、それぞれに正しい勉強をしていきましょう。（『ひびき』第十巻第六号・改題第十六号　昭和三十二年六月号）

こうした毛筆と硬筆との目的の違いは、「全日本青少年書作品展覧会（ひびき展）」の来館者用（親用）リーフレットの中でも繰り返し綴られていることが確認できる（註25）。しかしながら毛筆と硬筆との違いが全国的になかなか認識されず、その上、一般だけでなく、指導する書家たちも違いを明確にせず指導、発言している状況を日々感じ続け、繰り返し毛筆と硬筆との書教育の違いをことあるごとに述べ、記している。また、小林龍峰の言説をも引用して、このままでは「同じく字を書くということの中でも毛筆と硬筆の現代に於けるそれはそれぞれの分野として自ら全く別個の意義を持っているにもかかわらず、「毛筆と硬筆とをいっしょくたにしたりしていたのではいつまでたってもらちがあきません」（二月号、小林氏）。」（註26）と指摘している。このような毛筆と硬筆との目的の差違を考慮してであろう、『ひびき』では、表2のような部門を設定、その後、経年の中で改変を加え、各年代によって階層が分けられ、途中呼称の変更もあるが学習を進めている。

創刊当初は、課題の学習、古典の研究、そして作品の制作という各部門を設定していたが、「作品部」が十五箇月で終了している。それは、『ひびき』では、様々な表現の学習を指向し、試行してみることで、子供達の表現活動を広げる目的であったから、一気に自己表現を問う作品制作を目指す場のような作品部の廃止となっていったのだろう。また、「かな部」は、昭和三十三年（一九五八）八月号で毛筆課題の中に統合され、一時、同三十五年（一九六〇）二月号で特設されるが、翌月号の二回で「寸松庵色紙」を取り上げてすぐに終わり、以降、専門部の中で取り上げられる程となる。「かな」と言っても流麗、典雅な平安仮名の表現の臨書だけでは表現幅が狭くなってしまうためであろう。流麗、典雅な一調子だけでなく、そこからの「かな」表現、今日的な平仮名表現も含めての発展が期待されるところで、漢字、仮名の分け隔て無く、平安的仮名表現も「毛筆表現」の中での一表現法として見ることによって統合され、同様に「古典研究部」も課題を書き表すための参考とする多様な表現を学ぶ前例として、早い段階で整理統合されていったと思われる。それが大きな毛筆と硬筆の、「字を書く」目的の違う大きく二つの部門として設定されることになっていったと考えられる。

その上、指導者からの一方向で『ひびき』を作っていくことのないように、一方的な「お習字的お手本」は示さず、その月の学習の目標達成する為のあくまで参考の見本として、「二人以上の諸先生、並びに児童作品によってやっていきたい」と、多

（註17）
明治四十一年（一九〇八）東京生。父は書家・尾崎默峰。岡山高蔭に師事。昭和三十年（一九五五）秋、ピエール・アレンスキー撮影の「Calligraphie Japonaise」に草玄や子龍らと共に撮影されている。

（註18）
別図1、2のような、毎年の課題計画表・昭和三十六年（一九六一）十月号から同三十八年（一九六三）八月号分によれば昭和三十七年（一九六二）一月号の項に「西川寧」の名が記載されてあり、予定していたことが確認できる。

（註19）
「尊翰拝誦しました。非力の私、自分関係の〝書品〟にも義理をかき、目下やっとの思で十月号校正中というやうな次第ですので折角ですが御申越のこと御許願ます。あしからず願上ます。十二月十四日」

（註20）
「白寿・江口草玄のすべて」図録（二〇一八　新潟県立近代美術館）二三三―二三四頁参照。

（註21）
ただし、草玄は、西川寧を全く評価していなかったわけではなく、後年、平成七年（一九九五）二月十三日消印、読売新聞社菅原教夫宛手紙への返信（コピー）の中で、「西川寧の作品は私は評価するのですが――或る機会に西川寧の作品をじっくり見て――寧没後――戦後の書の中での寧作品は最高品かなと思い、これまで注目してなかった自分の不明を恥じたことがありましたが、（中略）寧がかんでふくめるようにして説いた〝文化としての書〟という理念」（中略）しかし、西川寧が、厳然とした格をともなうものとして説いたはずと思う「文化としての書」、（中略）なぜ西川寧が説いた一番大事な言葉「文化としての書」（後略）」と西川寧没後、評価が変化したことを書いている。

（註22）
昭和五十年（一九七五）九月二十二日消印、金子鷗亭、草玄宛葉書：ひびきいつも拝見しておりますつねに新味を盛るための御努力敬意を表します小生に臨書御下命のところプラジル展の為南米北米を廻り去月末帰朝十月は日展の審査あり本年は到底時間的餘裕ありませんのであしからず御了承願ます

（註23）
初めの一年を除き、昭和三十二年（一九五七）三月号から同五十一年（一九七六）の終刊号までの課題を各年ごとにまとめた一覧が確認できる。

（註24）
註18も参照。

（註25）
例えば昭和三十六年（一九六一）の第八回展リーフレット「おかあさんへ」では、次のように記している。（抜粋）：（前略）いわゆる実用的な意味での「字を書く」という要求にはペンや鉛筆といった「硬筆」によるのがいいのはあきらかなことです。毛筆とペンと鉛筆とではその構造が違うということをよくわきまえて「硬筆」の勉強をさせなければならぬわけです。本会でも「硬筆部」として指導をおろそかにして

表2　『ひびき』各部門の推移

創刊時 S31・3月号				
(毛筆)小一―一般	古典研究部	作品部	かな部 A・B部	ペン習字部 小学生／中学・高校・一般
一般が専門部に名称変更 S34・6月号(39(40)号) 小一～一般の各階層を書写部と創作部に分ける S34・9月号(42(43)号) 書写部と創作部が元の小一～専門部に戻される S34・11月号(44(45)号) 小学生未満の「幼」が加わる S38・12月号(93(94)号) 終刊 S51・12月号(249(250)号)	掲載終了 S34・10月号(43(44)号) 各階層で古典を取り上げることは創刊からあり、毛筆の中にまとめられる。	条幅作品部に名称変更 S31・9月号(7号) 掲載終了 S32・5月号(15号)	階層を「中学」「高校」「一般」に変更 S31・5月号(3号) 掲載終了 S33・8月号(29(30)号) この後は毛筆の中で仮名も取り上げるようになる。 S35・2月号(47(48)号) S35・3月号(48(49)号) 二号のみ「かな部」特設される。	小学生を「一・二・三年」「四・五・六年」に分ける S31・5月号(3号) 小学生を「一・二年」「三・四年」「五・六年」の三層に分ける。 S32・5月号(15号) 次号以降、その時々によって各階層を離合して実施される。 硬筆習字部に名称変更 S37・1月号(70(71)号) 小学生未満の「幼」が加わる。 S39・3月号(96(97)号) 終刊 S51・12月号(249(250)号)

いない理由でもあります。(中略)「書は人なり」とか「心正しければ筆正し」という言葉が昔からあります。その作品にその人の人格を見ることが出来るのが毛筆の字である、と受けとっていいと思います。人と作品とが最も直接的に結びつくものとして毛筆による字を見て来ているのです。(中略)書かれた字自体に或る目的なりその主体が置かれるという硬筆の場合に比較して、「書」の場合は、字を書く側、即ちこちら側の「人間」にあくまで主体があるのです(後略)

(註26)
草玄「後記」、昭和三十六年(一九六一)四月号(改題第六十一(六十二)号)、二十一頁。

様性のある表現を示し、子供達にも触れさせ、考え、表現できるようにしようとしていた。一般的な競書ではされない淡墨による「滲み」の表現（昭和三十一年（一九五六）七月号）、詩文を書いたり（同年十一月号、条幅部）、同じ字を他種の古典から切り抜いて比較紹介したり（同年九月号）して多様性を示して、子供達の表現の参考としている。また、年賀状や暑中見舞いの手紙の実践月があったり（同三十四年（一九五九）七月号）、拓本（同三十一年（一九五六）四月号）、印（同三十二年（一九五七）八月号）、そしてそれも芋版、石、木、ゴム板、消しゴムなどでも実践する月もあった。他に蠟引きで書いたり（同三十八年（一九六三）三月号）、マッチ棒で書いたり（同年七月号）するなど、墨と毛筆以外での表現法も体験させている。

その他、「ひびきの会」を構成している各支部の紹介を誌上に掲載したり、また一方で、「赤いポスト」「子供の便り」「リレー作文」等（註27）のコーナーを設け子供達の声、作文、感想文などを掲載し、稽古している大人や子供の親達が見、読むだけでなく、子供達にも身近に手に取られるような冊子となるよう工夫していた（註28）。しかし、そのため当然、その月例作品が提出され、子供達の表現が損なわれた作品や、指導者の技巧を真似した作品など、目に余る作品には厳しい評を下した（註29）。

こうした『ひびき』誌での毎月の練習、稽古の成果披露として、全日本青少年書作展（その後「ひびき展」、左記参照）が開催され、その後、子供達の練習、稽古の意欲をより高めるために二つの大会が『ひびき』誌上に設けられた。全日本一字競書大会では、普段、半紙に四字、六字と書いて練習していたものが、一字だけとなり、紙面の拘束も少なく、子供達は大きく自由に表すことが出来、子供心に楽しい練習時間だったようである（註30）。

○全日本青少年書作品展覧会
（ひびき展）

昭和二十九年（一九五四）一月に第一回が書教育学会主催で京都市美術館を会場に開催され、同三十二年（一九五七）第四回から「ひびきの会」主催で継続、主幹の草玄が当たり、春、同会場で開催。「第一部　半紙以外の作品。形、大きさすべて自由／第二部　半紙作品」で始まるが、「ひびきの会」主催の第四回展から「第三部　ペン習字（硬筆）」が設けられた。第四回から「ひびき展」と通称されていたが、同三十九年（一九六四）第十一回から正式に「ひびき展」に名称変更。『ひびき』の編集を退く同五十一年（一九七六）第二十三回が草玄の関わる最後となる。

○全日本一字競書大会

昭和三十一年（一九五六）六、七、八月の三箇月毎月一点出品して三箇月の合計で昇級、昇段試験を兼ねて第一回が設けられたが、第二回以降、六月から八月の夏期に一回行われるようになった。『ひびき』誌上に掲載。同三十八年（一九六三）からは冬、夏の年二回開催。『ひびき』の編集を退く同五十一年（一九七六）第三十四（三十五）回（註31）が最後となる。

○全日本ペン習字大会
（全日本硬筆習字大会）

昭和三十五年（一九六〇）十二月の締め切りで、第一回開催。翌年二月号改題第五十九（六十）号に掲載。同三十七年（一九六二）から年二回開催で、同年の第三回から「全日本硬筆習字大会」に名称変更する。『ひびき』の編集を退く同五十一年（一九七六）第三十（三十一）回（註32）が草玄の関わる最後となる。

（註27）
昭和三十二年（一九五七）十一月号（改題第二十一号）から同四十四年（一九六九）十月号（改題第百六十三（百六十四号）まで続いた。

（註28）
支部紹介関連は、昭和三十一年（一九五六）五月号（改題第三号）から同四十四年（一九六九）十月号（改題第百六十三（百六十四）号）の間、掲載される。

（註29）
『ひびき』後期でも貫かれていた。昭和五十年（一九七五）三月号三頁での高校・専門部での評の一例：「努力が足りない。引いているその自分の線に対して何の不満ももたないのではないかと思えるくらい、努力不足です。この程度のし方では古典はその固有のよさを決して見せてくれない。（中略）木下さん　線に、巾があっても厚み、深さがない。立体的な深い線を引く工夫が大事。／松村さん　やや筆をやわらかく使っているのはいいが筆使いが利巧すぎて、浅い。」

（註30）
令和二年（二〇二〇）九月十日、後藤祐自氏（註43参照）へのインタビューで確認。以下後藤氏の言は、このインタビューによる。

（註31）
途中開催回数に誤りがあり、昭和四十二年（一九六七）以降は、一回少ない回数が表記された。以降、（　）内は実際の回数。

（註32）
これも途中、昭和四十三年（一九六八）第十五回から回数に

「全日本一字競書大会」と「全日本硬筆習字大会」は、当初年一回の開催だったが、昭和三十八年（一九六三）から年二回の同時期開催となり、『ひびき』にほぼ同時掲載された。ここに少し経営的側面が垣間見える。書学習の雑誌として、他の競書誌と内容では一線を画したとは言え、雑誌出版継続の問題は、当然発生する。表1にあったように『ひびき』誌の価格も二十五円から最終的には百円となっている。「もはや戦後ではない」と言われ始める高度成長期の初め昭和三十一年（一九五六）から、高度成長期の終わり近くの同五十一年（一九七六）の間に物価は約十五倍となっており、物価上昇が誌代に反映されることもさることながら、『ひびき』誌存続のため、会員増加を図らなければならないし、そうするとやはり一般的に親御さんには、子供の昇級、昇段することが目に見える安心材料であることとしての側面は否めない。そうしたことでこの大会が年一回ではなく、二回開催によって、より昇級、昇段機会が増えることとしたことは想像に難くない。

しかしながら『ひびき』の指導や活動と、昇級、昇段で関心を釣ることとの指導姿勢の矛盾を草玄は抱いてた。草玄の偽らざる告白は、同五十一年（一九七六）一月号裏表紙の「編集室」にも記されている(註33)。矛盾を抱きつつも、子供達が喜んで稽古に真っ直ぐに向かえるように工夫し、一字競書大会では実質、子供達には通常のお稽古とは違う用具を使うなどの機会が増えることにも繋がり、「一字競書（大会）の前とかね、そういう時だけ特別にこんなのできる。それが楽しくてね。」(註34)と子供達当人には楽しみの回数が増え、稽古への関心が増したと思われる。草玄も同四十七年（一九七二）二月号の編集後記に一字競書大会の審査では、「自発的なよろこびの中で書を書いているかどうか、自発性がその子の生の根太いところに直結した自発性かどうかを見落さぬようにしたつもりである。◇ひびき全国展も、指導というよりは、一面、子供と大人の自分たちとの対等の対決の場所である。」と記している。このような葛藤を抱えながらも『ひびき』は運営されていたと見受けられる。

c.『ひびき』後期に表れる草玄の姿勢

通常の毛筆課題では漢字を中心としながら、そして低学年では平仮名を中心に課題計画を立てていることは別図1、3からも窺える。草玄の漢字指導は『ひびき』誌の全般に亘っているが、仮名では『ひびき』の活動当初には、「かな部」での前述のように池田烏川や森田竹華の指導や作品掲載だったものが、昭和四十五年（一九七〇）から草玄の仮名の参考作品の掲載の例も確認できる。この仮名の参考作品では、同年一月号（改題第百六十六（百六十七）号）から高校・専門部「仮名を習う」として半年間の六回、六月号（第百七十一（百七十二）号）まで原本と共に臨書を掲載している。

・伝藤原行成「重之集」[図10]　一月号（改題第百六十六（百六十七）号）「線の鮮度」
・伝藤原公任「大色紙」[図11]　二月号（改題第百六十七（百六十八）号）「鋒の開きを楽しむ」
・伝藤原行成「針切相模集」[図12]　三月号（改題第百六十八（百六十九）号）「細やかな敏感性」
・「春日懐紙」[図13]　四月号（改題第百六十九（百七十）号）「人くささの中で耀く力」
・伝藤原行成「曼殊院本古今集」[図14]　五月号（改題第百七十（百七十一）号）「新芽」
・伝藤原俊成「詞花集切」[図15]　六月号（改題第百七十一（百七十二）号）「人間の生」

誤りがあり、一回少ない回数が表記された。以降、（　）内は実際の回数。

（註33）
（前略）◇『ひびき』に於ける評価は、送られてきた作品、つまり「結果」の上に立つ以外にない。ところが実は、表現活動その中にいかに十全に没入しきっているかその時そこで大きな新しい自分自らの呼吸をしているかどうかが、「過程」の中で、実態をふまえて、見すえられていなければなるまい。「結果」だけでは乾ききった評価にならないか。（中略）しかし、時として好みの側面だけが出てきたり、まこと大ゆれの中での苦しい作業でした。その上、級を重視しているわけでもないのだけれども結果的には相も変らず級を売りものにし、級をつけている、この矛盾。◇以上正月早々からの、大ゆれの渦と矛盾との告白であります。（草）

（註34）
令和二年（二〇二〇）九月十日、後藤祐自氏へのインタビューで確認。発言中、「こんなの」とは、草玄の筆を借りて紙面に一字だけ大きく書くようなことを指す。

この六回では、平安仮名の定石とは異にした仮名の古典を学ぼうとしているように映る。この以前、同四十二年（一九六七）七月号から十二月号まで高校・専門部で森田竹華によって、「高野切第三種」、「高野切第一種」、「寸松庵色紙」、「関戸本古今集」、「十五番歌合」、「継色紙」と、仮名の定石的古典による指導がなされているが、草玄の参考作品による、この前掲六箇月の課題は、流麗典雅、優美なばかりの平安仮名だけではなく、名の知られる古典ではあるが、全てが平安仮名の標準的な仮名ばかりではない。行成の手と伝わる「重之集」、「曼殊院本古今集」、同手とされる「針切相模集」あたりまでを広く見て規範的とするならば、「大色紙」、「春日懐紙」、「詞花集切」は、書き手の手癖がより表れていると言える仮名である。しかも「春日懐紙」は鎌倉期のものである。単に平安期の貴族的上品な「細かさ、光沢、安堵感」を求めるより、細い線の中にも表れる線の太細や、筆の当たりに人そのものが筆に乗って表れている、その人のにおいを感じて表す、というような「かな」表現の学習目的をここでは取り上げているように映る。

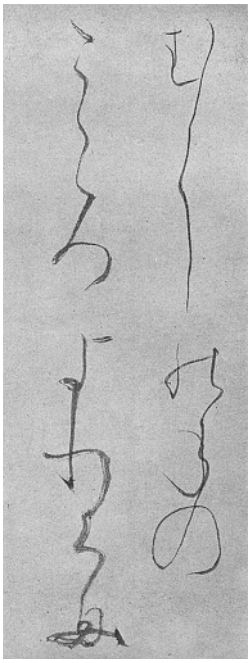


図10　臨重之集　昭和四十五年（一九七〇）一月号

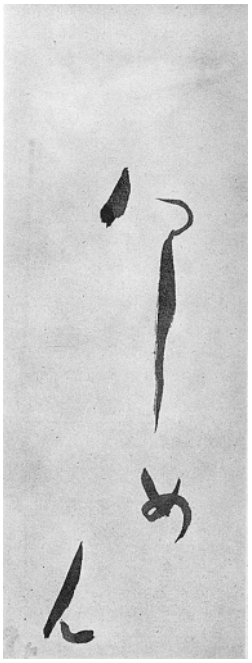


図11　臨大色紙　昭和四十五年（一九七〇）二月号

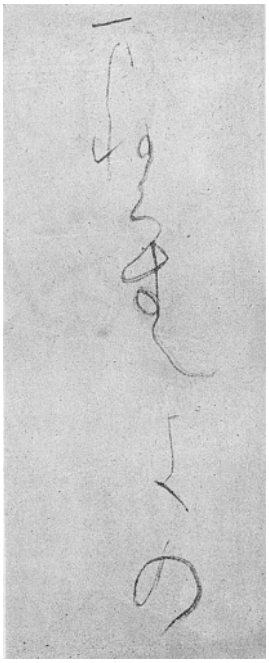


図12　臨針切相模集　昭和四十五年（一九七〇）三月号

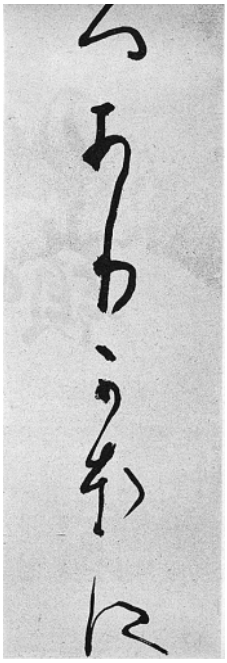


図13　臨春日懐紙　昭和四十五年（一九七〇）四月号

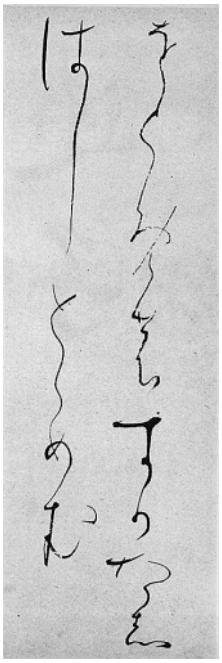


図14　臨曼殊院本古今集　昭和四十五年（一九七〇）五月号

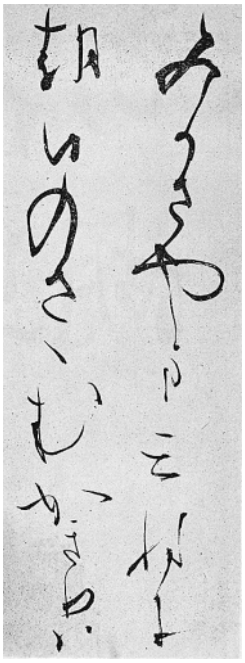


図15　臨詞花集切　昭和四十五年（一九七〇）六月号

また目を転じれば、この仮名の研究が昭和四十五年（一九七〇）であることにも、注目したい。

同年は、墨人会展など対外的には、これまで漢字作品を発表していた草玄が「かな」の作品を発表し始めた年と一致する。同年四月には、第四回日本現代書展に《てまりつく》[図16]、《無常》[図17]、《花のあわれ》[図18]の三点の「かな」作品の初出品をしている。必ずしも「かな」表現として、うまくいっているとは言い難いが、自分の作品として実践し、試行している姿が見られる。『ひびき』誌上での、この仮名の草玄の参考作品掲載の第一弾は半年で終わるが、三年後の同四十八年（一九七三）一月号から三月号の三回、課題に再び仮名を取り上げ、草玄の手による参考作品を掲載している。

・伝紀貫之「高野切第一種」[図19]　一月号（改題第二百二（二百三）号）「ねばり」
・良寛「牟羅き裳能」[図20]　二月号（改題第二百三（二百四）号）「躍、その大きな世界」
・藤原定家「基俊集付登蓮集」[図21]　三月号（改題第二百四（二百五）号）「相剋」

そして、同年、七月号から十月号では高校・専門部課題に「良寛を習う」として（八月号は漢字）仮名を取り上げ、別人の手による参考作品を掲載しているが、同五十年（一九七五）六、七月の二回、再び草玄の手による「関戸本古今集を習う」として臨書も掲載している[図22・23]。

昭和四十五年（一九七〇）の第一弾から同五十年（一九七五）の「関戸本古今集」までの取り上げた仮名の古典と共に草玄の臨書を見渡せば、よく見られる平安仮名の流れるような典雅で規範的な古典を繰り返し学び、その後、変化に富むものへと進むような学習順ではなく、規範的な古典に触れつつも、規範も一つの表現として多様な古典を見渡した上で自身の表現を考えて行く進め方であったように見える。筆法的なことを学習目的としているのではなく、運筆の中で表れる線の表情に視線が向けられていると捉えられないだろうか。それは、この草玄の取り上げた仮名古典の解説中、「重之集」での「線の鮮

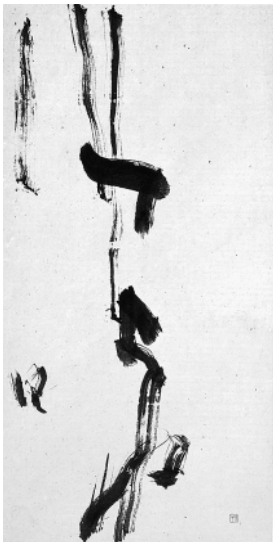


図16 《てまりつく》 昭和四十五年（一九七〇） 当館蔵

図17 《無常》 昭和四十五年（一九七〇） 当館蔵

図18 《花のあわれ》 昭和四十五年（一九七〇） 当館蔵

度」の文中に、「筆の毛のはずみを利して闊達に、筆毛のねじれ、はじき、そして紙を切って走るのを見よ」と、毛筆表現による筆毛の妙を語っている早い例が、確認できることや、また、四月号「春日懐紙」の「人くささ」という言葉も草玄の作品制作上の重要な語句であり、同年に起こってくる「作品の〝完成度〟の問題」で森田子龍と交える論争の中での、その早い使用例であることからも、単なる筆法だけでなく、表れている個性への視線、視点で表現を見ていることが裏付けられよう。さらに、同五十年（一九七五）の「関戸本古今集」も「（前略）細かく見ていくと、けっして例えば高野切の如く典雅美だけに終始せず、さまざまな変化の場面が展開されて、これはまことに、見て楽しい本である。（後略）」と言って、規範的仮名の連綿美を追うのではなく、それ以外に眼が向けられている点からも窺えよう。

前掲の「春日懐紙」の解説文に続く中にある「平安仮名のように上品さはない。貴族的なよそよそしさでなくぶあつい人の手が書いたという、かえって人間らしいにおいがしてくる。どこにでもある字かも知れない。それだけに、この、何でもない、ふだん着的な書きぶりをしているここにこそ芸術に最も不可欠な、ほんとうの人くささが生きているというものである。」と記している中で、「ふだん着」という言葉は、まさしく草玄の書の志向を語るものでもある。自分の書いた作品について「（前略）この一枚は、反古の代表なのです。（中略）書とは、反古です。反古でいいのです。ぜんぶ、反古でなければ

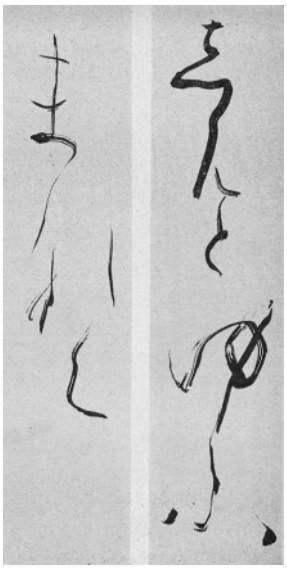


図19　臨高野切第一種　昭和四十八年（一九七三）一月号

図20　臨良寛書　昭和四十八年（一九七三）二月号

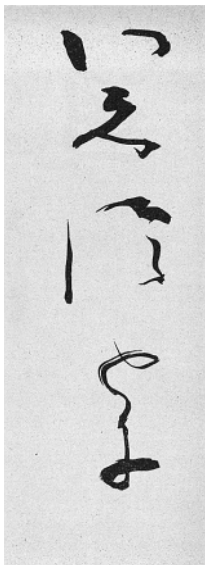


図21　臨基俊集付登蓮集　昭和四十八年（一九七三）三月号

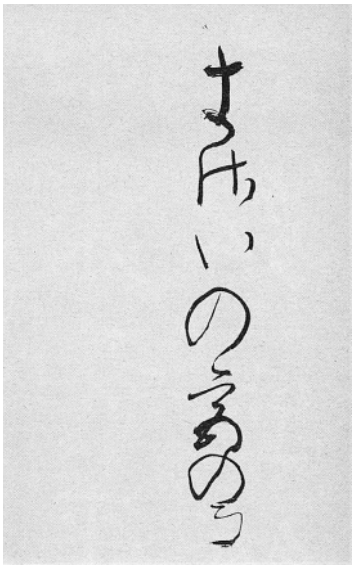


図22　臨関戸本古今集　昭和五十年（一九七五）六月号

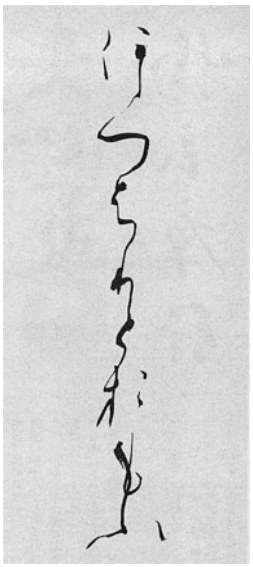


図23　臨関戸本古今集　昭和五十年（一九七五）七月号

ならないのです。ぜんぶ、反古。（中略）つまり未完であっても、未完であるが故により人間の生きざまの血がかよう、いとおしさ」(註35)と、技法的なことよりも、血の通う書ということに書の本質を見据えていた。その為、良寛の書に躍動を見たり、定家の臨書に臨む自他の制作姿勢を見たりしていることにも、形や流れのみを追う従来の仮名の臨書とは違ったところ、「ふだんの人間性の表出」を求める草玄の姿勢を主張していると捉えられる。

また一方で、『ひびき』の編集の中で、それまでは年一回くらい巻末に「後記」として草玄の書教育の考えについて記していたものが、昭和四十六年（一九七一）十月号から毎号「編集後記」、翌年三月号から「編集室」として記された。前述の「かな」へ眼が移って行くことと並行して、ここでは文部省による昭和三十三から五年（一九五八～六〇）の学習指導要領の改訂（小学校同三十六年、中学校同三十七年、高校同三十八年実施）の中で「書写」の言葉となり、更に同四十三から五年（一九六八～七〇）に改訂（小学校同四十六年、中学校同四十七年、高校同四十八年実施）されているにもかかわらず、「画一的に統制する筆使いや、形の取り方は全くナンセンスである。／にもかかわらず、その馬鹿げたことをやろうとしている現状」(註36)での学校教育の中での問題や、巷の書塾、団体、社中での師弟関係について改めて繰り返し記され、続けて「人間それ自体に直結した教育ということへの原点にたちかえった書学習のことを今こそ真剣に、一生けんめいに考え合うべきであろう」、「いろいろの教科を通して一個の人間としての創意を刺激し培い、育てていこうとしているのが初等教育の目標である筈。」等々、やはり血の通わない指導、一人一人を見ないで一法則に寄りかかっている書教育の現状に対して、本来的書教育の姿に立ち返る警鐘を、自戒も込めて記し続けている。まわりに左右されない個々の人の心の動きを自発的に表すことのできる人間性の育成について例を替えながら綴っていることが多く記されていることも、「かな」の学習で人くさい「かな」を草玄が取り上げていることと重なっており、この時期、草玄の書観がまとまり、強く打ち出されていくこととなった証と言えよう。

三、江口草玄の児童・生徒

草玄が開いていた書の教室は京都で最大三箇所であった。昭和二十八年（一九五三）八月下浣、柏崎から京都へ転居後、最初に開いたのは同三十五年（一九六〇）頃、京都市南区の東寺近く鍋取川八条付近。次いで同四十年（一九六五）に北区紫竹の自宅近くで、墨人会の加納菊女と共同で指導をした。そして同四十二年（一九六七）頃から中京区三条大宮の光明幼稚園の三箇所である(註37)。前二者は、同四十八年（一九七三）七月下浣に草玄が山科に転居する前年頃に閉じている。紫竹の自宅近くでの教室は、人数も増えたが、加納に任せて止めたという(註38)。光明幼稚園では、平成二十年（二〇〇八）一月四日に脊椎管狭窄症による手術を受ける前年の同十九年（二〇〇七）まで続いた。この光明幼稚園の途中までが『ひびき』を自身で主幹し、その指導を子供達に実践していたことになる。昭和五十一年（一九七六）末の『ひびき』終刊後は、翌五十二年（一九七七）一月号から堀尾勝彦編集による『響』に加わり、そこでの活動を取り入れつつ、『ひびき』活動の時からしていた草玄独自の指導をしていたことと推定される(註39)。

このように三教室を開いていたが、『ひびき』誌上では、小学生から一般まで筆の使えない幼児を除いた全年齢を対象とした階層を設け課題を各々掲載していた(註40)。各支部では、こうした幅広い年齢層の構成によって運営されていたようであるが(註41)、草玄の開いていた三つのいずれの教室でも、基本的には小学生のみが対象であった(註42)。

(註35) 江口草玄《地べたのぬくとさ》の説明文「わたしの〝反古〟」『ひびき』昭和四十九年（一九七四）三月号（改題第二百十六（二百十七）号）、二十四頁。

(註36) 「編集後記」『ひびき』昭和四十六年（一九七一）十月号（改題第百八十七（百八十八）号）、裏表紙。

(註37) 令和二年（二〇二〇）九月二十七日、磯部一美、江口久幸姉弟へのインタビューで確認。

(註38) 註37に同じ。

(註39) 昭和五十二年（一九七七）以降、『響』誌上で草玄の記事掲載が確認もでき、平成五年（一九九三）二月号でも草玄の記事掲載が確認できることから、堀尾の活動への協力を確認ができる。『白寿 江口草玄のすべて』図録「江口草玄 文献一覧」二百八十六―二百八十七頁。

最初の鍋取川八条付近の教室では昭和三十七年（一九六二）末から翌年三月までの間に、能面師の後藤祐自氏が通い始めている(註43)。後藤氏は、「お習字はもうおしまい」、「中学に入ったら来なくてもよろしい」と小学六年生の終わり頃に、草玄から言われたとの言が残る(註44)。後藤氏は、小学一年生終わり頃から鍋鳥川八条近くの教室（「坊城通り教室」と後藤氏は呼んでいた）で草玄に学び、小学六年生の終わり、中学生に進学する際にこの言を草玄から言われたと言う。後藤氏は昭和三十年（一九五五）生で、小学一年は同三十七年（一九六二）度、小学六年は同四十二年（一九六七）度である。後藤氏の記憶では中学生は、当初数人いたようではあるが、後藤氏同様「中学に入ったら来なくてもよろしい」と草玄に言われ、次第に居なくなり、中学二年生の夏には、中学一年生の子と二人、翌三年生時ではたった一人だったようである(註45)。そうした中で後藤氏は、遊びながらも中学生になっても続け、『ひびき』とは関係なく、『書の古典（中国編）』三版（書道出版社刊　昭和二十九年（一九五四））を草玄から貰って専ら臨書をしていたと言う。そのことは、中学生ながら同四十五年（一九七〇）十二月号の『ひびき』高校・専門部「厳然たる存在の姿　龍門二十品を習う(6)」で臨書と共に紹介解説で草玄に取り上げられ、「（前略）今月は後藤祐自君の臨書を出して、見ることにした。筆に不満があるとしても正に若々しい力をその引かれている線の奥に蓄えているのを見る。彼は龍門造像の一ページだけを――十数字――一年間、黙々と書いていた。その執拗なねばりに敬意を表している私である。」[図24]と掲載している。この頃の臨書は、練習の度、草玄が数枚づつ預かり、大事に取り置きしていた。この頃の取り置きしていた作品[図25、26]も現在、後藤氏の手許に「これ全部預かっていたけどもういらないわ」と言って、後藤氏が結婚された後に返されたと言う。後藤氏の草玄への親しみは高校生になっても続き、同四十六年（一九七一）夏、原付免許を取ったことから、書を続けていくようなら光明幼稚園での稽古に来る様に草玄に誘われる。そこでは、小学生のお稽古、練習の後、仏教大学書道部の学生が専ら臨書をしていた。そこでまた一緒

図24　『ひびき』昭和四十五年（一九七〇）十二月号

図25　後藤祐自《臨造像記》昭和四十五年五月二十一日（中三）

図26　後藤祐自《臨蘭亭叙》昭和四十六年五月二十日（高一）

（註40）
昭和三十八年（一九七三）十二月号からは就学前として幼児も階層の対象に加わった。

（註41）
終刊の昭和五十一年（一九七六）十二月号時点での『ひびき』参加の構成は、小学生（幼児含む）約千九百人強、中学生約百人、高校・専門部約九十人。

（註42）
中学生や大人も若干数、教えていたが、後述するように中学生は声を掛けられていたこともあって、早々に辞めていき、大人も画家・須田剋太の奥さんや友人などの知り合いなどで僅かだった。

（註43）
後藤氏は昭和三十年（一九五五）京都生。金沢市立金沢美術工芸大学で日本画を学び、京都市の中学校美術教諭を経て、独学で能面の研究をする。能面の修理、修復をする他、数少ない能面師として「面匡会」「祐門会」を主宰して制作指導し、普及にも尽力。現在、宝生流宗家・金剛流宗家の能面修復に携わる。金沢市在住。

（註44）
後藤祐自「能面談義」　北陸中日新聞　平成七年（一九九五）七月十一日付。

（註45）
前掲の後藤氏へのインタビューと、『ひびき』の昭和四十三～六年（一九六八～七一）の競書成績表の確認による。

になって黙々と臨書をしていたと言う。草玄の特段の指導は無く、草玄も一緒に臨書をしていたと言う。そして時折、古典の話や書人の話を、書いている大学生と交わしていたと回想する(註46)。この仏教大学書道部学生との錬磨は長くなかった。半年程で幼稚園側からの申入れで終わったようである(註47)。草玄との会話もほとんどなく、まれに「君は渇筆がいいね。」か、「筆は洗うんではなく、洗ってやるんだ。」と声を交わした程度であったとも聞く。「中学生に入ったら来なくてよろしい」という発言は、中学生以上の人達は、書を追求する同じ立場として、その人格を認め、前掲の「筆に不満があるとしても正に若々しい力をその引かれている線の奥に蓄えているのを見る。」と述べたように、それぞれが自己研鑽をした中から書は摑んでいくものと考え、師匠と弟子というような主従の関係では無く、等しく書を追求しあう同胞との考えからによる為と思われる。

こうした草玄の指導は徹底されていたようである。例えば小学生には「〝書を「教える」〟のでなく、書を書くことの中で〝子供を「育てる」〟ところに書教育の本来がある。つまり、結果よりも過程に、より多くの意味を持つのである。」(註48)ということから、小学生には、永字八法的なトメ、ハネ、ハライを細かく指導するのではなく、そのため「きれいに書きなさい」というようなことはなく、枠や紙面から点画がはみ出ても「出たら出たで良い」と言って、子供の純真なありのままの表現を大切に指導していたと言う(註49)。これらのことからも、成長し、自我の目覚め始めた中学生からは、当人の考えを尊重し、その表現を尊重し合う中となるようにしていた――そこには師弟関係は生まれない――という書本来の学究の姿を実践していたと言えよう。書を学究する立場に師も弟子も無い、個、それぞれの書を追う、草玄の書に思う姿勢が見えてくる。それは当然、墨人会発足時からの考えでもあった。

なお、他二箇所の教室も小学六年生に対して「中学に入ったら来なくてよろしい」と告げていたか不明であるが、草玄の書教育の姿勢を見れば、他二箇所も同様であったと思われる(註50)。

四、終わりに

草玄が二十一年に亘って注力した『ひびき』誌は、子供の競書雑誌という書の学習雑誌であったことから、これまであまり顧みられなかった。しかし、草玄は墨人会退会一年九箇月後の昭和五十三年(一九七八)三月三十日に発行した『草玄ことば書き』の中で、二十一点の作品に加えて、この『ひびき』での編集後記が自身を語る文として、冊子に再掲載しており、これまでその意義を筆者は摑みきれずにいた。しかし今回、全二百五十冊を具さに見渡せたことは、草玄の書教育面のみならず、この『草玄ことば書き』に「当時、わたしは自分自身の作品づくりのことも犠牲にして書教育にかかわる〝ひびき〟の仕事をしてきたのであった。わたしにとってはやはり唯一懸命な場所でもあった。」と記したように、草玄にとって作品制作だけでなく、人生の上で大きな意味を持っていたことが判明し、草玄自身が書に対峙する厳しくも純粋な姿勢、思想を、別側面から補足することができうる材料となったと思われる。また指導を受けた後藤氏の言を伺い、それらのことが確認できたことは、裏付けを強くするものであり、確証に繋がるものと心強く思われた。『ひびき』は、草玄のもう一つの純粋な自身の表現の場であったわけである。作品での発表だけでなく、子供達への書教育の面で自己実践した、その表現の一つに『ひびき』が加えられると言えるのではないかと考える。

(註46)
後藤氏だけで無く、当時の仏教大学書道部学生、公森仁氏、山川正道氏への令和二年(二〇二〇)十一月二十三日付手紙の回答による確認による。

(註47)
註46に同じ。

(註48)
江口草玄「作品を見て」『ひびき』昭和三十八年五月号(改題第八十六(八十七)号)、四頁。

(註49)
註37同じ。

(註50)
磯部一美氏、江口美愛氏(久幸氏令室)は、教室の運営を手伝ったこともあり、インタビューからも、そうした姿勢だったことが窺える。

『ひびき』は、草玄にとって墨人会に属していた時の一つの表現の姿であった。そしてその終了は、墨人会の纏も捨て、身一つでいよいよ作品制作本位に眼を大きく切り替える区切りとなったことに間違いないと思われる。

本稿の執筆するにあたり、多大なる御協力を賜りました磯部一美氏、江口久幸・美愛御夫妻、また、「ひびきの会」で学んだ能面師の後藤祐自氏、当時、仏教大学書道部学生で一緒に臨書した、公森仁氏、山川正道氏、各氏の御氏名をここに記し、また、情報提供等賜りました関係各位も含め、ここに改めて感謝申し上げます。

（新潟県立近代美術館　専門学芸員）

【参考文献】

・『墨友』第五巻第三号（創刊号）―第九巻第二号（終刊号）　昭和二十七年（一九五二）四月一日発行―昭和三十一年（一九五六）二月一日発行　書道出版社
・『書教育』No.1―No.32　昭和二十八年（一九五三）四月一日発行―昭和三十一年（一九五六）二月一日発行　墨美出版社
・江口草玄編『ひびき』創刊号―第二百四十九（二百五十）号　昭和三十一年（一九五六）三月一日発行―同五十一年（一九七六）十二月一日発行　墨美出版社（日本書道学舎）
・江口草玄著『作品集「草玄ことば書き」』　昭和五十三年（一九七八）三月三十日発行　江口草玄
・芸術新聞社編『近代日本の書　現代書の源流をたずねて』　昭和五十九年（一九八四）四月二十一日発行　芸術新聞社
・『愚人作品集』　昭和六十二年（一九八七）一月一日発行　愚人会事務局
・日展史編纂委員会編『日展史17 日展編二』　昭和六十二年（一九八七）三月三十一日発行　社団法人日展
・『季刊墨スペシャル第10号　現代の書　半世紀の歩みと展望』　平成四年（一九九二）一月五日発行　芸術新聞社
・O美術館編『書と絵画との熱き時代　１９４５～１９６９』図録　平成四年（一九九二）（一月二十五日発行）　O美術館
・『現代の書芸術―墨象の世界』　平成九年（一九九七）十月二十八日発行　淡交社
・新潟県立近代美術館編『白寿 江口草玄のすべて』図録　平成三十年（二〇一八）五月二十六日発行　新潟県立近代美術館

別表　掲載、執筆者の一覧　※不明箇所は空欄

	氏名	所属	備考（地域は初回掲載地）
1	浅野五牛	奎星会	岡山／師上田桑鳩
2	浅沼伝一		岩手／遠野市綾織小学校
3	天池芳明	毎日系	富山／師大澤雅休
4	荒谷文子		広島／熊野市立第一小学校
5	有田光甫	学者	師上田桑鳩
6	安中俊道	奎星会か	
7	飯田八重子		名古屋市立浄心中学校
8	飯原弘喜	墨人会	高松市／中学校
9	家城竹嶺	奎星会か／毎日系	小田原市立久野小学校
10	池田烏川	橘書道会／日展系	京都
11	池田水城	平原社→草人会	東京
12	池田直	鯤会	東京
13	石島よしみ		埼玉
14	石政美代子		
15	石本安広		大津市立平野小学校
16	井関徳松	墨人会	和歌山市立富貴小学校
17	伊勢屋光華	奎星会／若草書道会	兵庫／師宇野雪村
18	磯部南海雄	墨人会	神奈川
19	井田律子		
20	一条虎之進		福島
21	井上静枝		
22	井上有一	墨人会	神奈川
23	今井洲翠		
24	今井松喬		浦和
25	今井満里	蒼狼社	師今井松堂
26	今岡徳夫	墨人会	京都
27	今泉楓佳		埼玉
28	芋生皖哉		
29	入沢勝義		北海道／小樽市立緑小学校
30	岩田佳峰		
31	岩田俊		東京
32	上田桑鳩	奎星会	師比田井天来
33	上田素笛		和歌山／妙寺小学校
34	鵜飼寒鏡	草人会	愛知／大妻女子大学教授／師鈴木翠軒

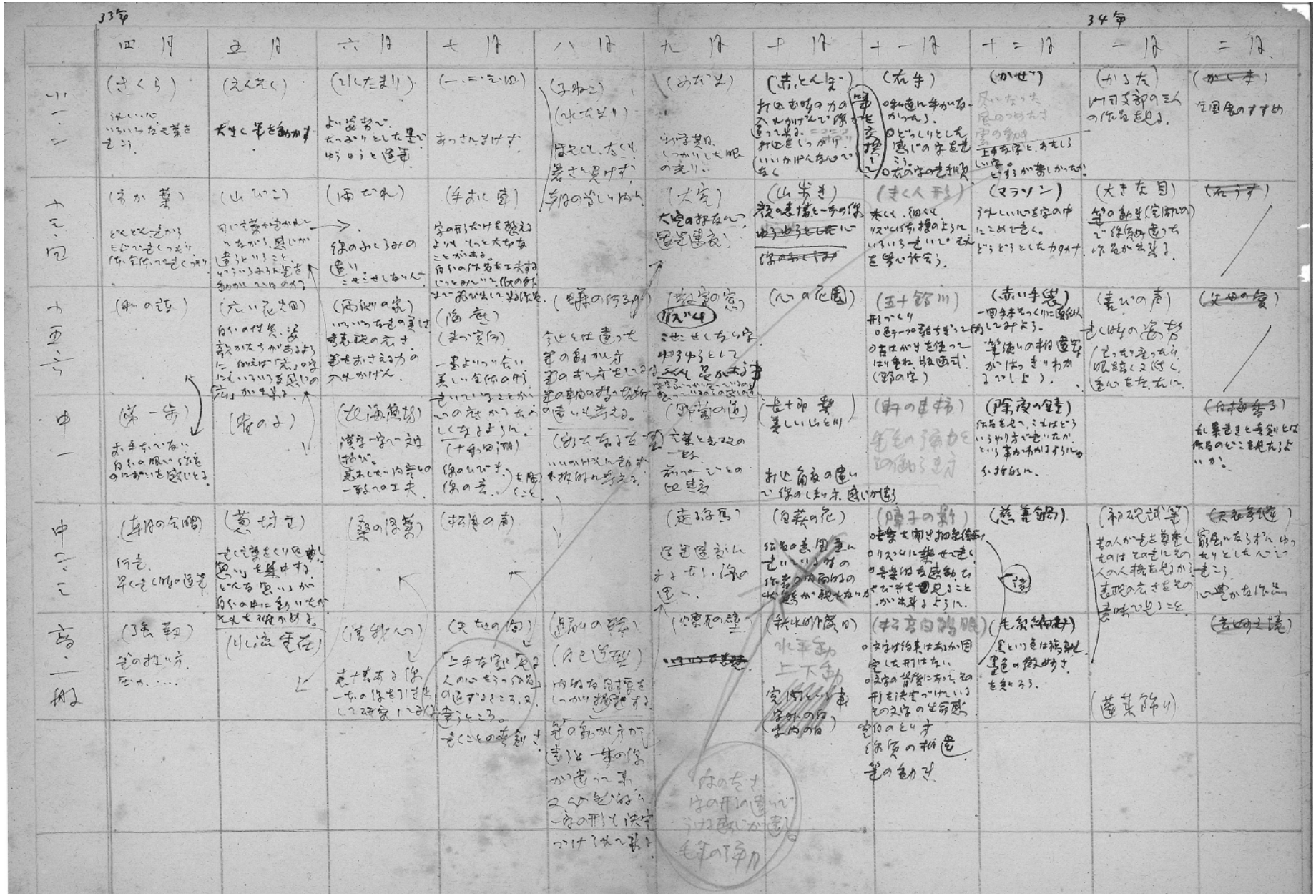
	氏名	所属	備考（地域は初回掲載地）
35	浦野正	独立書人団	松江市立中原小学校
36	江川蒼竹	書壇院	師吉田苞竹
37	大浦真理子		北海道標津町
38	大沢華空	墨人会	
39	大沢晩成	墨人会	東京
40	大島節子	墨人会	神戸
41	大島礼子		神戸
42	大塚えつし	蒼狼社か	
43	大友登	蒼狼社か	秋田
44	大野良明	墨人会	美濃市立第一中学校
45	大脇文子		岐阜／神坂小学校
46	大和田光明		
47	岡稔	墨人会	高田
48	小笠原孝子		
49	岡田剛愚		岐阜／美濃小学校
50	岡田富美子	墨人会	横浜
51	岡部蒼風	草人会→蒼狼社	東京
52	岡本恵美子		広島
53	小田秀幸	墨人会	堺
54	岡村雄風	奎星会か	
55	奥田百年		旭川市立第二小学校
56	奥村千鶴		岐阜
57	門田其外		兵庫／新宮町
58	金津雄三	（墨人会）北海道書連	札幌
59	金森朴堂		島根大学
60	金森世耕		
61	金子鷗亭	創玄書道会	書道藝術社／師比田井天来
62	亀川勲		兵庫
63	川嶋靖雄		静岡
64	北野智子		
65	君本昌久	詩人	神戸
66	櫟大介		
67	桑原翠邦	書宗院	師比田井天来／書道藝術社
68	河野久美子		

	氏名	所属	備考（地域は初回掲載地）
69	河野純子	墨人会	東京／両国小学校
70	木ノ花政治		北海道／比布小学校
71	児玉義信		広島
72	幸田峰月		大阪／阪南高校
73	公森仁	愚人会	滋賀
74	後藤千郁	墨人会	岐阜
75	小林龍峰	平原社→草人会	東京／師大澤雅休
76	小松原茂		岩手／江刺町立中学校
77	込山清卿		
78	小柳新吉		
79	近藤豊子		
80	佐賀三恵子		
81	酒井静子		福岡
82	佐々木臂山		広島
83	佐藤蒼龍	奎星会	秋田／師上田桑鳩
84	佐藤大朴	平原社→墨人会	札幌／師大澤雅休
85	早苗恭子		神奈川
86	塩田慥洲	墨人会	旭川
87	塩野松雲	墨人会	和歌山
88	茂林孝華	学書院／日展系	秋田／師柳田泰雲
89	篠田昭二	墨人会	名古屋市立浄心中学校
90	島南城		
91	清水信男		静岡
92	清水草舟	墨人会	浜松
93	下山秋翠	独立書人団	北海道留萌市
94	白倉丘		新潟阿賀／義務教員
95	城市武久		
96	神野繁男		和歌山
97	神野辰彦		堺
98	神野弘道		和歌山／師瀬川杢人
99	神野正彦		
100	菅原晴一		北海道／風蓮旭小学校
101	鈴木嘉雄	墨人会	名古屋
102	鈴木海南		

	氏名	所属	備考（地域は初回掲載地）
103	鈴木富山		埼玉
104	鈴木帆舟		埼玉／鳩ヶ谷小学校
105	鈴木満		旭川第二小学校
106	須田剋太	画家	
107	瀬川埜人		
108	関谷義道	墨人会	岐阜
109	園田熊美		鹿児島
110	高橋蒼玄	墨人会	岐阜／中津川市立第一中学校
111	篁英堂		広島
112	田島白龍		
113	田中栄喜		
114	田中君枝		松江／朝日小学校
115	多飯昭道		広島
116	玉有芳流（崇峯）	独立書人団	徳島／小松島小学校
117	田村みや子		
118	茅田友兄		福岡
119	鳥集恵策	墨人会	宮崎／都城
120	辻太	墨人会	岐阜
121	手島右卿	独立書人団	書道藝術社／師比田井天来
122	東志青邨	墨人会	
123	徳村大和		福岡／門司
124	冨田九鳴	奎星会	師上田桑鳩
125	冨田重明		芦屋
126	豊島鐘城		青森／八戸
127	豊田玲風		
128	中江嘉雲		京都
129	中川寒泉	全書研	大手前高校
130	中川幸子		大阪
131	中島栄喜	独立書人団	松江市立古江小学校
132	中村玉谿		滋賀／彦根
133	中村二柄	学者	
134	中村木子	墨人会	佐渡
135	中本清峯		北海道
136	奈良節夫		群馬／片品南小学校
137	鳴海正雄		北海道

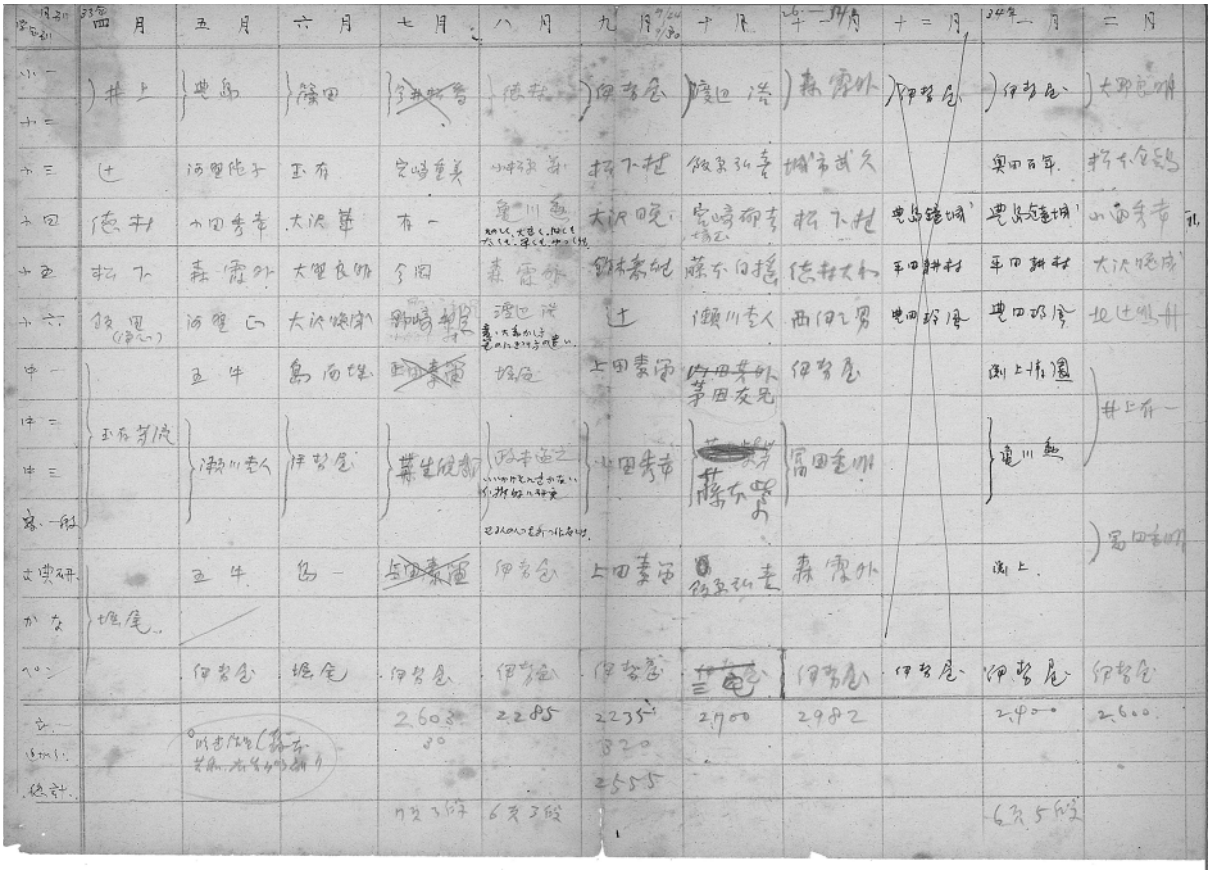
	氏名	所属	備考（地域は初回掲載地）
138	乗末夢漠		広島
139	西伊三男	墨人会	和歌山
140	野崎邦臣		島根／松江第三中学校
141	野地紅霞		
142	破崎光善		富山／日南市立東郷小学校
143	馬場怜	墨人会	北海道
144	原口寿之		北海道
145	原田正憲	墨人会／全書研	大阪／桜塚高校
146	はらだはじむ	洋画家	愛知／自由美術
147	原納大梅山	舎本高等学校書道教育研究会	大阪／天王寺高校
148	日置路花	蒼狼社	千葉／無限会
149	秀島踏波	毎日系	大阪／豊中高校
150	平井信		
151	平井隆堂	日展系	広島／師村上三島
152	平田耕村	墨人会	和歌山／橋本市
153	平野倉二	墨人会	愛知
154	平間直吉		北海道／愛別村
155	樋口朝堂		会津
156	樋口悌右	墨人会	東京
157	藤西仁香		宮崎
158	藤川要	墨人会	岐阜
159	藤田鈴川		
160	藤本啓	墨人会	尼崎／立花中学校
161	藤本紫芳		千葉
162	淵上清園	墨人会	熊本／水俣
163	古谷椿村		福岡
164	堀尾勝彦	墨人会	愛知／岡崎
165	政本遂之	墨人会	和歌山
166	松井如流	東方書道院	書品／師吉田苞竹
167	松井政雄		滋賀
168	松下桂香	墨人会	西ノ宮
169	松本邦代		埼玉
170	松本金鶏		群馬
171	松本芳翠	書海社／日展系	書海社／師近藤雪竹
172	松宮橘邨	書道教育学会	多賀教育長

	氏名	所属	備考（地域は初回掲載地）
173	真鍋裕司		
174	間山啄水	墨人会	青森
175	三浦関山		旭川
176	三上裕愛		北海道／礼文町立内路中学校
177	三上礼子		
178	水上祥邦	墨人会	旭川
179	溝口秋生	墨人会	熊本／水俣
180	宮川利一		
181	三宅保郎	墨人会	広島／庄原市／庄原高校
182	宮崎郁吉		
183	宮崎重美	毎日系	富山／城端小学校／師大澤雅休
184	村上翔雲	日本書芸院／日展系	神戸／師近藤摂南
185	村木享子	墨人会	東京
186	百瀬和子		埼玉
187	森霞外		福岡／大牟田市／師石田霞洞
188	森下松径		
189	森田子龍	墨人会	京都
190	森田竹華		東京
191	矢橋幸一	墨人会	北海道
192	谷辺橘南	日本書芸院／日展系	師辻本史邑・比田井天来
193	山形頼子		京都／平安女学院高校
194	山本恵文		富山／平中学校
195	山本文雄		富山
196	山本六郎	日本画家	
197	横田礼子		札幌東高校
198	吉田功	墨人会	大阪
199	吉丸竹軒		岩手大学
200	和井田要	毎日系	青森／八戸
201	鷲見勲		北海道
202	和田清		島根／安城中学校
203	渡辺一夫		島根
204	渡辺彩		愛知
205	渡辺青華		神戸
206	渡辺浩		岐阜／美濃加茂市
207	渡辺芳秋	書典社	名古屋／師萩原冬眠

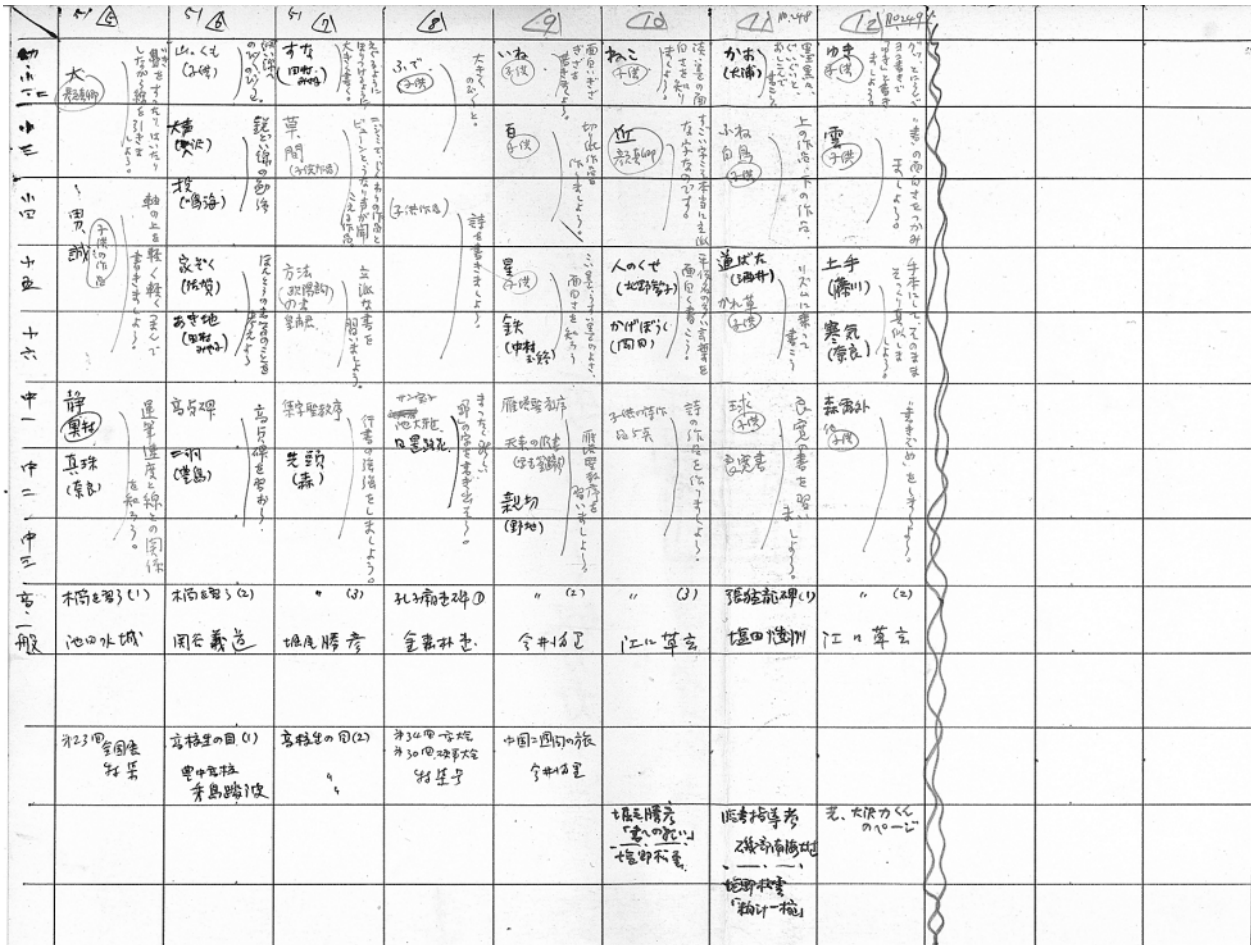


	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月
一・二	(さくら)	(えんそく)	(りしたまり)	(一・二・三の)	(子ねこ) (ひとまり)	(めだま)	(赤とんぼ)	(右手)	(かぜ)	(かるた)	(~~かしき~~)
十三・四	(わか葉)	(山ていこ)	(雨だれ)	(手おし車)		(大空)	(山歩き)	(きく人形)	(マラソン)	(大きな目)	(~~たうす~~)
十五・六	(私の弟)	(元い花畑)	(雨傘の家)	(海岸) (まつ実) (十五夜の月)	(雨の行列)	(学校の窓)	(心の花園)	(五十銭川)	(赤い手袋)	(青い声)	(~~父母の愛~~)
十七・八	(第一歩)	(雀のよ)	(海岸)			(野菜の色)	(五十銭の愛)	(車の里帰り)	(陰夜の金魚)		(~~はなかざり~~)
十九・二十	(春の気配)	(麦刈り)	(麦の保育)	(牧場の南)		(走る子馬)	(白菜の花)	(蜻子の新)	(慈善鍋)	(初雪が来)	(~~天和参考館~~)
二十一・二十二	(手袋)		(小流金魚)	(小鳥の心)	(新聞の話) (白と黒)	(小麦の壁)	(秋晴の作文)	(オオ白鳥眼)	(先祖納め)	(麦葉飾り)	(~~ちゆうと橋~~)

別図1 課題計画表(横向き) 昭和三十三年(一九五八)四月号―三十四年(一九五九)三月分



別図2　指導者計画表　昭和三十三年（一九五八）四月号―同年三十四年（一九五九）二月号分



別図3　課題計画表　昭和五十一年（一九七六）五月号―同年十二月号分